

保育科学生の「主体性」における考察—中動態の概念から—

山村けい子（兵庫大学短期大学部）

1. はじめに

2018年に保育所保育指針、幼稚園教育要領等が改正され、その中に「子どもの自分に対する自信や自己肯定感を育てていくことは、保育の大切なねらいの一つである。一人一人の子どもが、保育士等との間に形成された信頼関係を拠りどころとしながら、日々の生活の中で主体性や生きることへの意欲を育んでいることを、保育士等は常に心に留めながら、子どもと関わることが大切である¹」とある。また、高等教育のグランドデザインでは「生涯学び続ける力や主体性を涵養するために…²」とある。

近年、この「主体性」を身につけることをあらゆる教育の目指すことと言われている。この「主体性」とは「自分の意志や判断によって自ら責任を持って行動する態度や性質」と言われている。つまり「能動的」とらえられているのである。「主体性」は、このような概念としてとらえられ、保育、教育の場面で本当に育てていけるものだろうか。

今回「中動態」という概念（國分2017）に出会い、この視点から「主体性」の概念を捉え、学生の考える「主体性」に変容を与え、実習を通して、また保育者として子どもの「主体性」も深く考える機会になることを望んでいる。

2. 研究目的

保育や教育の場面では「自分からする」と「他人にやらされている」ということが度々ある。この「自分からする」という行動が「能動的」であり、「他人にやらされている」という行動が「受動的」と対立的に考えられている。

國分（2017）は「中動態」を次のように説明をしている。

「能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させるものであった。われわれは中動態に注目することで、この対立の相対化を試みている。（中略）主語が過程の外にあるか内にあるか問われるのであって、意志は問題とならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない³」

つまり「主体性」が「能動的」であるという概念には限界があり、意志とは別の「中動態」という概念で捉えることで実習に臨む学生の「主体性」についてもっと理解が深まるのではないだろうか。また、子どもの「主体性」を育む保育者を育成するには現場の「実習」が、子どもの「主体性」を考える重要な機会になるのではないだろうか。学生自身は、この「主体性」をどのように理解し、捉えて実習に臨んでいるのだろうか。

3. 研究方法

実習に行く前に学生に事前に簡単なテーマについて記述をし、実習後は2つの回答についてそれぞれに記述をした。

保育科第三部3年生79名

(1)事前指導

「実習生として「主体性」をもって実習に臨む態度を「具体的」に挙げてください

（主体性の概念を伝えている）

(2)事後指導

「1. 自分の考えが大きく変わった。

2. 少し変わった」の2択をし、それぞれ変わったところを書きだした。

それを分類した。

4. 結果（今後の課題）

事前のテーマについては、一番多かった記述は「わからないことは何でも質問をする」であった。次に「先生から言われて動くのではなく自分で考えて動く。積極的に行動をする」であった。一番多かった記述は、自ら「行動する」ことが、「主体性」という概念とは違い、自分がすべき行動をする前に他人の考えを聞くという行動があることに驚き、「主体性」の概念の捉え方に大きな課題が示された。「中動態」の考え方にある意志で動くのではなく、目的に対する行動に対してはある意味「受動的」でもあり、「中動態」の意味する「意志」が前景化されていないと捉えられたが…。今後の「主体性」を育む教育には大事な視点であり、課題である。

【引用・参考文献】

1. 保育所保育指針解説書（2018）
2. 中央教育審議会（2019）
3. 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』（2017）医学書院 p97